

郷里中津の福澤諭吉先生 120 回忌法要 — 琴の追善演奏・記念講演会 —

皆さま、ご無沙汰しております。国内は、新型コロナウイルスで騒がれていますが、いかにお過ごしでしょうか。2月のホームページの TOPICS サロンで郷里中津での法要のお尋ねがありましたので、ご紹介したいと思います。今年は、NHK 取材も入り、ニュースで放送されました。

中津では、ご命日に福澤旧邸保存会、市教育委員会が中心となり、菩提寺の明蓮寺で毎年法要が行われます。令和2年2月3日120回目のご命日は、梅の花にメジロが飛び交う春の兆しを感じられ、お天気に恵まれました。

中津市長奥塚正典氏のご挨拶に始まり、読経とともに生田流箏曲最高師範による「六段の調べ」が流れる中、参詣者は次々と手を合わせお参りします。以前にも触れましたが、福澤諭吉先生はご自身で箏曲「六段の調べ」を弾かれたことから、ご命日には琴の演奏が添えられます。参列者は中津市長、市民の皆さん、慶應義塾OBの皆さん、看護医療学部山内教授が参集されました。法要後は、市内ホールで生田流箏曲社中による「六段の調べ」追善演奏があり、続いて、山内教授の「福澤諭吉と北里柴三郎 二人を貫く独立の気力—」記念講演がありました。会場は立見が出るほどの盛況ぶりでした。また、北里柴三郎記念館の方々のご来場が紹介されると、会場から歓迎の拍手が起こりました。



中津市では、慶應義塾の協力のもと、市民講座や記念講演会が催され、歴史を遡って学ぶ貴重な機会が得られます。質疑応答の際、市民の皆さんの見識には驚くものがありました。それが講演の人気の高さに繋がっているのだと思いました。山内教授の講演は、東大出身の北里柴三郎がベルリンから帰国し、脚気の主張の違いで職に就けない苦境のなか、福澤先生との出会いから支援を受け、国初の私立伝染病研究所、土筆ヶ岡養生園、そして北里研究所の設立に至るのです。お二人の学問への姿勢、独立の気力が伝染病医療の確立につながったと思いました。



当時、日本では、腸チフスやコレラが発症し療養所が不足していました。政府の圧力、一部の情や権力に流されることなく、民衆のことを考え信念を貫き学問、研究に取り組んでいかれます。この強さはどこから来るのか。学問と政治を切り離し学問の独立を目指し、これこそが、独立の気力であり、今でも慶應義塾で引き継がれているのではないでしょうか。

山内教授のお話はユニークなエピソードを織り交ぜながら分かりやすい言葉に置き換え、北里柴三郎と福澤先生がどのように考え、行動されたのか、巧みな話術にのめり込むようでした。結びの二人を貫く



独立の気力で、福澤先生の精神を受け継いで北里柴三郎が偉業を成し遂げられた、お二人が歩まれた当時に思いを馳せ、胸が熱くなりました。そして、お二人の出会いが日本の医学の礎を築いたと確信しました。私の疑問だった慶應初代医学部長の所以が良く分かりました。

昨年 11 月、中津市歴史博物館が中津城近くに開館しました。中津ゆかりの偉人特別展なども催されています。加えて、福澤記念館でも、趣向を凝らした企画展が開催されていますので、訪れてみませんか。最後に、城下町中津のひな祭りの写真も掲載致しました。

渡邊郁美



